

10年ぶりのパナマ：激しい変貌と未来への期待

ほぼ 10 年ぶり訪問のパナマは、懐かしい“スコールの歓迎”から幕を開けました。11 月の中旬。雨季。車で空港から市内に向かう途中、突然に激しい雨がフロントガラスをたたきつけます。10メートル先もよく見えない。ライトをつけ徐行運転。でも市内のホテルに着くころには雨はすっかり上がっていました。ところが、空港の後方を見ると空は真っ黒。あちらは今、土砂降りの模様。雨雲の流れに沿ってスコールが移動しているのです。



パナマ運河（ミラフローレス水門）

迎えてくれたパナマの友人Mさんはいみじくも言いました。

「ホラ、日本で聞いた諺があるでしょう？たしか『雨降って地固まる』って」。すでに 10 回以上、訪日している“日本通”のMさん。これからの私の動きをおもんばかって、なかなかしゃれた言葉をかけてくれたのです。

それにしても——なんとパナマシティの変貌の激しさ！20年前、私が特派員として駐在していたころは、高層ビルといえば数えるくらいだった市内に、ニョキニョキと、まるでマイアミかニューヨークを思わせるようなビルが建っています。オフィスというよりも、大部分が 20 階、30 階建でのマンション。それに建築工事の進行形を象徴するクレーンが、目の届く範囲だけでも 30 本以上、空に向かってそびえていました。

草原と荒地に囲まれていた開設当時のパナマ日本人学校も、今は高層マンションに囲まれ、はるか上のほうから覗き見されているような感じです。

街は車の洪水。電車、地下鉄がなく、道路しか交通手段がないことにもよりますが、どうも状態は都内よりひどい。なぜこんなに変わったのか？

「外国からの投資ですよ。アメリカ、ベネズエラ、コロンビア、そしてアラブまたユダヤ人からもネ。日本はあまり目立たないなあ」

とMさん。チェックインした



雨季のセロ・アンコンから望むパナマシティ

ホテルもやっと予約できたもので「今は、いつ、どこのホテルも満杯です」とのことだっ

た。

1989年、アメリカ軍の侵攻とノリエガ將軍の逮捕。1999年末、アメリカからパナマ運河と同運河地帯の返還。政治の民主化。さらに10年計画でのパナマ運河の拡張工事も始まって建設の槌音も高い。パナマは今、新しい建設の時代に入っていました。

降り立った空港名も「トリホス（元將軍）国際空港」からそれ以前の名前「トクーメン国際空港」へと戻り、軍の影響下にあったものはほとんど消えつつあるようです。そしてアメリカの統治下にあった、緑豊かな運河地帯（沖縄県ほどの広さ）も、パナマ政府の管理の下で今、開発が進んでいます。

一方、物質面の発展の陰では、精神面の荒廃が生じてくるのも歴史の教訓です。こうした状況下で、仏教団体であるパナマSGI（創価学会インタナショナル）が、社会から、特に教育界から高い評価と期待を寄せられていました。滞り中の11月19日には、元運河地帯



に開設されてまもなくの国立パナマ大学のキャンパスに「池田大作公園」「池田香峯子庭園」が設置され、そのオープニング式典が学長、学部長等の出席のもと行われました。同時に「世界の子供たちのための平和展」のオープニングも大学校舎内で行われました。

5日間の滞り中、さまざまな機会に仏教徒メンバー

パナマ大学キャンパスにオープンした池田大作公園

とも懇談する機会もありました。どこの国にあっても、経済が発展、物質主義が蔓延すればするほど、人々の精神の高揚と深まりが求められます。激しい最近のパナマの変貌と発展ぶりに、パナマSGIの果たす役割、使命の大きさに改めて思いをいたすパナマ訪問となったのでした。